

「山に学び、山で楽しみ、山の自然環境を考える」
もう一つの山歩きの楽しみ・・・自然観察



噴煙の残るアヴァチンスカヤ山（2,741m）山頂から望む雲霧のかかるコリャークスカヤ山（3,456m）とスコリア上の植物（左からハイマツ、スコリア上の先駆植生群、リシリヒナゲシ、チシマクモマグサ）

 一般財団法人 自然学総合研究所

西 條 好 迪

自然観察

もう一つの山歩きの楽しみ その4. 岐阜県天生湿原のワンデイ・ハイク

西條好迪(一般財団法人自然学総合研究所)



いよいよ標高も低くなり里が近くなってきましたが、急いで下山せずに寄り道をしてみましょう。今回は、特に岐阜県飛騨地方の白川村・飛騨市河合両村境にある天生湿原を案内します。

天生湿原は、「越中西街道」唯一の峠である天生峠(標高 1,280m)の南西約 0.7km にあります。湿原といいますと釧路や尾瀬があまりにも有名ですし、中部地方でも八島ヶ原(霧ヶ峰)や葦毛(愛知)などがよく知られていますが、天生湿原もこれらに劣りません。また、天生峠周辺には大小さまざまな湿地がみられ、ムカシトンボ・カラカネトンボ・ハッチョウトンボ・エゾイトトンボ・ルリボシトンボ・カオジロトンボ等の貴重な棲息地となっています。

それでは、まず、いくつかの湿原の現況を 2, 3 紹介しましょう。



鹿児島県屋久島の高層湿

屋久島の標高 16,40m に位置する我が国最南端の高層湿原、花之江河の湿原では、ヤクシマニガナ・コケスミレ・ヒメコナスビ・ヤクシマコケオトギリ・ヒメウマノアシガタ・モウセンゴケその他の特徴ある湿性植物が生育していますが、ヤクシカの侵入により、植生の攪乱が急速に進行しています。

また、本州中部の代表的な高層湿原の一つに八島ヶ原湿原があります。霧ヶ峰の八島ヶ原湿原内の泥炭層が発達した部分では、ミズゴケを主体にしてキリガミネアサヒラン・ヒメシャクナゲ・ツルコケモモ・モウセンゴケ・キリガミネアキノキリンソウなどが生育しています。



長野県下諏訪、霧ヶ峰の八島ヶ原池塘

湿原の周囲にはコバイケイソウ

・サワギキョウ・アカバナシモツケ・ワタスゲ等が生育する湿性の草原になっていますが、近年、乾陸化も進みノリウツギ・レンゲツツジ・サワラ・シラカンバほかの樹木の侵入が著しくなってきました。さらに、ここはニホンジカの行動圏にもなっており、防

鹿ネットが設置されるほど、採食圧による植生の退化が危惧されています。

本州で、規模の大きい湿原に尾瀬ヶ原があります。このうちのアヤメ平では、ミタケスゲ・ショウジョウバカマ・タテヤマリンドウ・ヒメシャクナゲ・ミツガシワ等が観察されますが、一部では乾陸化が進み湿原植生の後退もみられます。



群馬県尾瀬，アヤメ平の湿原

ところで、アヤメ平の湿原植生の荒廃は古くから発生していましたが、植生の維持を目的に、ミタケスゲの播種による植生工が継続して実施されています。

このように湿原も遷移の進行に伴って、いずれ陸化していきますが、その例に福島会津の田代湿原があげられます。

この湿原は遷移が進んでおり、泥炭の堆積のため池塘は弘法沼ひ

とつのみで、ほとんどが草原となっています。なお、湿原全体に木道が整備されてり、最奥部の田代山避難小屋(弘法大師堂)から、さらに栃木県境となっている稜線を歩く登山道があり帝釈山まで約 1 時間の行程です。この一帯に生育する植物として、ヒメシャクナゲ・チングルマ・イワカガミ・ワタスゲ・キンコウカ・コバイケイソウ等が挙げられます。また、近傍に小田代湿原がありますが、ここは田代山湿原より標高が低い分、花期が全般に一週間ほど早く訪れるようです。



福島会津の田代湿原，草紅葉

それでは、本題の天生湿原に話を戻しましょう。天生湿原への入り口となるのが国道 360 号線の、白川村と飛騨市境界の天生峠です。泉鏡花の小説「高野聖」(明治 33 年刊行)の舞台としても知られています。また、国道 360 号線は富山県細入村猪谷と岐阜県白川村鳩ヶ谷を結びますが、白山スーパー林道を経由して石川県小松市に至る山間地の道路でもあります。



ここは前回紹介しました粍糠山や猿ヶ馬場山への登山口のブナ林に接して広がる湿原で、規模こそさほど大きくありませんが、6月上旬のミズバショウやニッコウキスゲの名で知られるゼンテイカの花季、7月上旬の新緑、さらには10月の紅葉を訪ねてハイカーの多い場所でもあります。



この天生峠周辺の湿地では、群生するゼンテイカ（ニッコウキスゲ）が観られ、陸
化した部分にコバイケイソウ、ヤマドリゼンマイと共に生育しています。





ヤマドリゼンマイ

天生峠付近より靱糠山山腹にかけていくつかの湿地がありますが、これらのうち、比較的規模の大きいものとしては、匠の館湿原、ミズバショウ群生地、木平湿原があげられます。

木平湿原(標高 1,595m)は、天生峠より靱糠山に至る尾根上の窪地に形成された湿原で、水源は直接の降雨と降雪に依存しています。本湿原は「小平」ないしは「子平」

と誤って表記されることが多く、現地の道標にも誤記が見られました。



木平湿原（夏季）

ここでは、高層湿原を形成し、湿原面には数カ所の小丘を持ちヤマドリゼンマイやモウセンゴケの優占する小丘があります。

ところで、植物自体が枯れた後は分解して土に還っていきますが、その速度は、気温の低い地域や水中では極端に遅くなります。とくに、気候の冷涼な当地域では、池や沼に生育している植物も過飽和状態の水中で低い水温と相まって遺体が分解せずに堆積し、長い年月を経て陸化していきます。やがて樹木が侵入するなどして森林化していきますが、その移り変わりの途中に成立しているのが湿原ということになります。

このうち、植物遺体が未分解のままで泥炭になった部分が泥炭湿原と呼ばれます。さらに、泥炭が堆積し全体としては突状地のような地形になったものが高層湿原で、そこ

に生育する植物の栄養源は大部分を雨水に依存するため、養分が乏しくなり PH も低くなります。したがって、このような環境下ではミズゴケ類やヒメシャクナゲ・ホロムイソウ・モウセンゴケ・シラヒゲソウなどの耐酸性植物が中心の植物社会を形成します。



モウセンゴケ



ヤマドリゼンマイ

また、粍糠山への分岐付近には、ミズバショウ・ザゼンソウ・リュウキンカ等が混生する湿地があります。



ミズバショウ（サトイモ科）
泥沢地にザゼンソウと共に生育



ザゼンソウ（サトイモ科）
花序と仏炎包の形から名付け
られた植物で全体に不快な臭気
をもつ



リュウキンカ（キンポウゲ科）
天生ではミズバショウと共に
群生する

ところで標高 1,420m に位置する天生湿原の中心は、匠屋敷跡のわずかに残されたブナの低木林内に広がる部分で、断層運動の結果生じた沼(窪地)に形成したといわれています。湿原自体は3カ所に分かれ面積もそれぞれ 1.0, 0.7, 0.2ha と規模こそ小さいものの、ホロムイソウなど北方系植物の南限になるなどして、貴重な財産になっています。湿原をとりまく周辺の植生は、樹高 10m 前後のアオモリトドマツ(オオシラビソ)・ブナ・ミズナラ・ヤマハンノキが混生する疎林で、ナナカマド・タムシバ・アカミノイヌツゲ・ハイイヌツゲを低木に、マイズルソウ・ゴゼンタチバナ・ミツバオウレン・ツルリンドウなどが林床に生育します。この湿原は 1967 年に岐阜県の天然記念物に指定されていますが、1997 年には動植物の再調査が行われ、靱糠山を含めた自然公園として環境の保全対策が進められています。



さて、天生湿原では水路に沿ってミズバショウ・ミツガシワが分布し、その後背部にザゼンソウ・リュウキンカ・コバイケイソウ・ゼンテイカなどが生育します。ここには、ワタスゲ・イワショウブ・シラヒゲソウ・ツマトリソウ・モウセンゴケがミズゴケと共に観られます。



一方、この西側のミズバショウ群生地(標高 1,385m)は、水路沿いに 30~40m 幅で 200m に及ぶ群落で、特に上流部 100m は、4~22(平均 15.2)株/㎡の生育をみるほどの見事な景観と分布量です。

それでは、ここでみられる代表的な植物を、いくつか紹介しましょう。



ワタスゲ



シラヒゲソウ



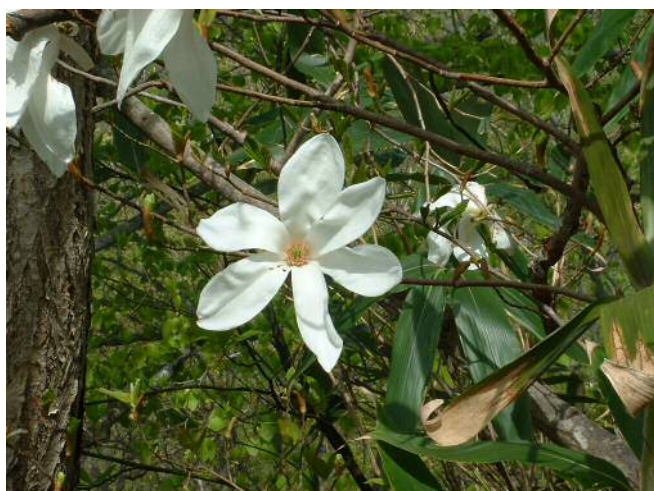
ヒメシャクナゲ



アカミノイヌツゲ

アカミノイヌツゲ（モチノキ科）

本州中部地方中北部から北海道にかけて広く分布しますが、とくに、日本海側の山地帯から亜高山帯に生育します。



タムシバ（モクレン科）

日本海側多雪地のブナ林を指標しますが、暖温帯にまで分布域を広げています。

岐阜県東濃地域では、場所によっては、シデコブシと混生することも多く、自然交雑して、両種の特徴があい混じった形状を示すこともあります。



ゴゼンタチバナ（ミズキ科）

山地帯上部から高山帯にかけて分布しますが、高山のハイマツ低木林の林床を特徴づける種でもあります。



ツルリンドウ（リンドウ科）

東アジア原産の蔓性の草本で、山地帯落葉広葉樹林の林床に普通に生育します

いかがでしたか？

私達のすぐ身近にも素晴らしい自然があります。次回は、丘陵地に広がる照葉樹の自然林と里山の雑木林を歩いてみましょう。